２０１８年（平成３０年）８月１０日　金曜日

東奥日報＜夕刊＞　３面　掲載

甲子園100回

県勢の球譜

－5－

光星学院　（2012年 第94回大会）

3季連続準優勝 悔いなし

2012年8月23日、第94回夏の甲子園大会決勝。前年夏、その年の春と2季連続準優勝の光星学院（現・八戸学院光星）は「三度目の正直」を懸けて、大阪桐蔭と戦っていた。九回2死で、スコアは0―3。追い詰められていた。

「俺まで回してくれ。絶対何とかするから」。二回にチーム初安打を放った6番武田聖貴（きよたか）さん(24)＝岩手県北上市在住＝はネクストバッターズサークルで待つ間、ファウルで粘る5番大杉諒暢（りょうちょう）さんを祈るように見詰め続けた。気がはやって座っていられない。中腰のままだった。

武田さんは北上市で生まれ育ち、甲子園への近道と思って光星を進学先に選んだ。夜遅くまで行われた練習。道具の後片付けなどで日をまたいだこともある。

苦しくても、自分を信じて毎晩素振りを続けた。「どんくさいけれど、まじめに一生懸命やるやつ」と仲井宗基監督。皆が認める努力家は、関西出身選手を押しのけてレギュラーをつかんだ。迎えた高校集大成の試合を、笑って終わりたかった。

3季連続準優勝となった光星学院ナインに拍手を送るスタンド応援団＝2012年8月23日、甲子園

だが武田さんの願いは届かず、大杉さんは空振り三振。大阪桐蔭の選手は歓喜に沸き、地元関西チームを応援するファンが多かった甲子園が揺れた。「ほとんどの人がこの瞬間を待ちわびていたのかな」。武田さんは思わず天を仰いだ。

ベンチ前で整列すると、大杉さんが号泣していた。この日2失策、3三振。攻守で精彩を欠き、責任を感じていたのかもしれない。でも武田さんを含め、他は誰も泣いていなかったと記憶している。「勝っても負けても最後のゲーム。力全てを出し尽くしたので、悔いはなかった」。後にプロ入りする田村龍弘さん、北條史也さんといった超高校級の選手を擁し、歴代最強とうたわれた強打のチームは、単打わずか2本と力負けに終わった。「相手が一枚上やったな」。宿舎に帰った後の仲井監督の言葉にうなずくしかなかった。

武田さんは卒業後、地元の信用金庫に勤め、今年で6年目を迎えた。上下関係を大切に思う心とつらいことにもくじけない忍耐力。

武田　聖貴さん

【2012年8月23日】

▽甲子園決勝

光星学院	000	000	000	0
大阪桐蔭	000	120	00×	3

180キロ離れた八戸市で過ごした3年間は大きな財産として現在に生きている。昨年春に結婚し、今は勤め先の軟式クラブで楽しみながら、野球と向き合っている。

そして心から待ち望んでいるのは、青森県勢の全国制覇だ。「レベルは着実に上がっているはず。東北勢初の優勝、白河越えを果たしてほしい」。6年前に届かなかった夢は、第二の故郷に住む後輩たちがかなえてくれると信じている。

（松田啓志）

＝終わり＝

節目の甲子園100回大会が始まった。中継するテレビ画面を見ると、ふと足が止まる。「あんなすごいところで試合をやっていたんだな、とんでもないことをやってのけたんだな」と実感する瞬間だ。7月はインターネットの情報を頼りに、気になる青森県予選の勝ち進み具合を小まめに調べた。母校の甲子園初戦は11日。「強豪ぞろいだけれども、一戦必勝で頑張ってほしい」とエールを送る。

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです